



第83巻 第4号
年4回発行
社会福祉法人 慈生会
〒165-0022
東京都中野区江古田3-15-2
TEL 03-3387-5567
http://www.jiseikai.jp
振替口座 ベタニアの家
00170-6-15317

「60年の歩み」

小野崎 孝史

創立者フロッジャク神父、そして諸先輩方、多くの恩人の方々が築き上げてきたこの那須の地で、マ・メゾン光星は今年60周年を迎えることが出来ました。これまでのご恩情に心から感謝申し上げます。

昭和21年、皇室の旧御料地3百町歩の貸し付けを受けたフロッジャク神父は、那須の山に牧畜や農耕を活かした戦後引揚者の為の事業及び、核回復者のアフターケア事業の起業を目的とした、遠大な夢を描き、開拓が始まりました。

その大きな夢の変遷の中で、昭和31年、精神薄弱児施設「光星学園」を開設、その後、東京オリンピックが開催された昭和39年に現在の「マ・メゾン光星」の原点となる精神薄弱者援護施設「松風荘」が開設されました。

当時施設では、「指導」という言葉が使われ、知的障害者の自立更生を念頭に、施設での保護により、家

族の負担を軽減することが目的とされ、主に就職する為の訓練として作業が行われておりました。その為、入所期間は3年を原則とする通過施設としての位置付けで、社会に巣立った方も多くいたようです。

作業部の変遷は、既存の児童施設(光星学園)に編成された作業部への出向及び、那須事業所への通勤といった形から始まり、那須の土地・自然を活かした作業を暗中模索する中で、昭和51年に児童施設が廃止され、成人施設「松風荘」の名称が

「光星学園」に変更されて以降は、「畜産部」乳牛飼育、「林産部」椎茸栽培と山林管理、「農芸部」野菜作・園芸、「手工芸部」木彫・粘土・手芸の4部門を主な作業と位置付け、

重度・中度・軽度といった障害の程度に応じた作業部編成となりました。その頃の入所者は20〜30代と若く、作業以外にも運動会やマラソン大会、那須登山や湖水浴など、職員と共に、施設という垣根を超えた活気溢れる生活が営まれていたようです。

時代は流れ、平成15年、措置制度から契約制度に変わり、「光星学園」

から「マ・メゾン光星」に名称が変更され、福祉を取り巻く環境が目まぐるしく変化し、障害者が地域で暮らすためのサービスが整備され始めました。

マ・メゾン光星におきましても平成21年の入所更生施設から障害者支援施設への移行に併せて、利用者の地域移行も図りつつ、定員を段階的に減らしての、新たな出発となりました。その後は、利用者の高齢化、障害の重度化が進む中で、平成23年に起きた東日本大震災の爪痕も残り、光星学園時代のようなダイナミックな活動支援は少しずつ難しくなってきました。現在は規模を調整しながらも、療養活動と併せて昔から続く那須の地を活かした活動を続けております。

昨今では、地域の福祉ニーズの具現化を役割とし、平成30年に放課後等デイサービスの開設、そして、令和5年に多機能型事業所の開設と、那須の山から下りた所でも慈生会の事業は広がりを見せております。

「那須には大きな夢がある」、これからも創立者フロッジャク神父の想い、そして、カトリックの精神に基づいた揺るぎない運営に尽力しつつ、私たちは夢を見続け、那須の恵まれた自然の中で生活する全ての者の上に、神様の祝福が降り注ぎますよう心から願っております。

(マ・メゾン光星 施設長)

ベタニアの家 永年勤続表彰者

(三十年表彰)

- 聖ヨゼフ老人ホーム 妙圓蘭 晃
聖ヨゼフ老人ホーム 大津とみ子
ナザレットのの家 山口 貴子
ナザレットのの家 定岡 真理

(二十年表彰)

- 本部事務局 関 政嗣
マ・メゾン光星 津田 可奈
マ・メゾン光星 田村 綾
ベタニアホーム 鍋流馬和子
ベタニアホーム 並木裕佳理
ベタニアホーム 岩崎 翔太
ベトレヘムの園病院 田中 修

(十年表彰)

- 聖家族ホーム 富田 浩
ベトレヘムの園病院 青木 信彦
ベトレヘムの園病院 山中 美幸
ベトレヘムの園病院 上野明日香
ナザレットのの家 野田 由貴
ベトレヘム学園 太田 順子
ベトレヘム学園 上原 健斗
ベタニアホーム 西澤 亜実
中野ケアプランセンター 光成ほのか
原子美奈子

『ベタニアの家チャリティー』

今年もベタニアの家チャリティーコンサートを開催いたします。皆様のご参加とご協力をお願いいたします。

日時 令和六年十二月十日(火)

開場 十三時

開演 十三時半

出演 野方区民ホール

チケット 鈴木直樹氏

チケット&申込問い合わせ

(福) 慈生会 法人本部事務局内

ベタニアの家チャリティー

コンサート実行委員会

電話番号 03-3387-5567

主催 ベタニアの家

チャリティーコンサート実行委員会

「30年続けられた思い出」

妙圓園 晃

聖ヨゼフに就職して30年。私が、慈生会の職員として続ける源となっている出来事を一つお伝えしたいと思います。

ご利用者のお一人に右麻痺でお話しすることが不自由で、生活のほとんどに援助が必要な方がおられました。その方は、不慣れな左手で特殊なスプーンを使って食事を召し上がり、リハビリでは、ちぎり絵を生懸命に行う方でした。

ある日、私が居室で衣類の片づけをしていると、その方が何かを言ううとして、気が付きました。近寄ってお聞きすると片言で「元氣・出して・・・」と励ましてくださったのです。

その頃の私は、業務やご利用者ケアで悩んでいましたが、ご利用者の前では不安を出さないように注意していました。しかし、一人で仕事をしていた事で、態度や表情に出していたのだと思いました。

心配をかけて申し訳ない事をお伝えすると、笑顔で「大丈夫・・・」と答えてくださいました。

日常の何気ない思い出の一つですが、私に力を与えてくれた思い出をこれからも大切にしたいと思えます。

(聖ヨゼフ老人ホーム 副施設長)

三十年に感謝

大津 とみ子

三十年前、学校を終えたばかりで聖ヨゼフに入職した私は多くの方々から可愛がっていただきながら、まさに光陰矢のごとく過ぎました。まずはお礼を申し上げます。

幾多の方々との出会いとお別れを積み重ねたことが私の財産であり、積みかさなった時間が懐かしく思い出されます。

支援を要する方々が増え、支える者が減る中、あまりにもビジネスライクとなった介護は心を置き去りに冷たい契約に変わったようです。

施策者や、その立場の識者がいるような理屈を述べますが、それに盲従する事に疑いを感じています。現場には酸いも甘いもあります。

言葉だけ飾っても空しいだけである事は、皆様ご存じの事だと思いますが、様変わりする状況を免罪符に自らの役割に高を括って諦めてはならないと思う事があります。

創立者フロッジャク神父は「仕事屋になつてはいけませんよ。」との言葉を残しておられます。その原点に立ちかえりつつこれからの残された時間、皆様との関わりを楽しんでゆきたいと考えています。

(聖ヨゼフ老人ホーム 介護職員)

これからも感謝を忘れず

山口 貴子

この度は永年勤続表彰をいただきありがとうございます。

とても長かったような、あっという間だったような、ハラハラドキドキしどうしの三十年間だったような気がしてきます。

入職当初、仕事を覚えるのに必死の毎日。そんな中、ミルクを飲んでくれない、何をしても泣き止まない、寝てくれない赤ちゃん。途方に暮れる日々でしたが、子どもたちの笑顔に救われ、支えられてここまで続けてくる事が出来ました。

担当していたお子さんが成人され、立派に活躍している姿を拝見し、とても嬉しく感じました。改めて永く続けて来た事実を感じる瞬間でした。

職場の諸先輩方、同僚、お世話になったシスター(ステキなメッセージカードをいただき胸がいっぱいになりました)に広く温かい心で見守っていただいたこと、深く感謝いたします。

失敗と反省ばかりの毎日ですが、これからも一日一日を大切に真面目に勤めていきたいと思っております。

(ナザレットの家 保育士)

「支えられて続けられた三〇年」

定岡 真理

この度は、永年勤続表彰を頂く事が出来て誠に光栄に思います。

記念式典当日、ナザレットの家が清瀬に移転してから訪れることのなかった聖堂やみこころ広場を目にして懐かしい気持ちと入職したころの思い出が鮮明に蘇りました。

乳児院の存在を知って保育士を目指し、ご縁を頂いてナザレットの家に入職しました。

新卒で入職してから三〇年、たくさんのお子とも達と出会い、今も子ども達と共に過ごす時間があることは、とても有難いと感じます。

そして、多くの事を学び、たくさんのお人と一緒に働くことができたことは、私にとってかけがえのない思い出です。

保育士として働く中で、良いことばかりではなく、自身の環境の変化もあり不安な時期もありましたが先輩や同僚の皆さんの支えがあったからこそ今日まで勤めることができています。

これからも仕事に尽力してまいりますので、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

(ナザレットの家 保育士)

『ロケットの糧に感謝します』

北川 裕子

徳田保育園では、給食の前に小さな手を合わせて感謝のお祈りをします。園の食育を通して子どもたちの姿をご紹介します。

七月末、花組(二歳児)では、午後のおやつ用の「トウモロコシの皮むき」をしました。朝のお集りで、トウモロコシはどこで育つかを問うと「土に埋まっているよ」「りんごみたいに木になっている」との答えでした。私は、数週間前に慈生会の研修で訪れた那須高原に広がっていたトウモロコシ畑を思い出しながら絵を描いて子ども達に見せました。神さまがお作りになった恵みの一つです。

給食室から大きなザル二個にたくさんのおとうもろこしが盛られて運ばれてくると、子ども達は大喜びです。保育士がやり方を提示すると一本ずつ手にして皮をむこうと奮闘する子ども達。皮の下からピカピカの黄色い実が出てくると満足そうに持ち上げて見せてくれました。給食さんが焼きトウモロコシに変身させてくれたおやつは美味しそうでした。R君は手をつけないでジッと見ているので、粒をバラバラにして勧めると、いつも食べている大好きなトウモロコシだと気が付いて嬉しそうに食べ始めました。



トウモロコシの皮むき

苦手で食べられない野菜も遊びの場面ではお気に入りとして登場することがあります。野菜を題材とした手遊びや給食によく登場するピーマン、ゴーヤ、ニンジン、レンコン等は野菜スタンプで楽しみます。遊びを通して食材に親しみ、「一口でも食べてみようかな」と考えチャレンジすることに繋がった時は、お互いに笑顔になります。



野菜でスタンプ

今年二月には園の夏みかんが「庭の夏みかんマフィン」になりました。七月には園庭のヤマモモの赤い実が「七夕きらきらゼリー」になり給食を彩ってくれました。これからも、私たちが食べられることへの感謝の気持ちを大切にしたいと思います。

(徳田保育園 保育士)

「櫓(やぐら)が繋ぐ納涼祭」

荒城 貴広

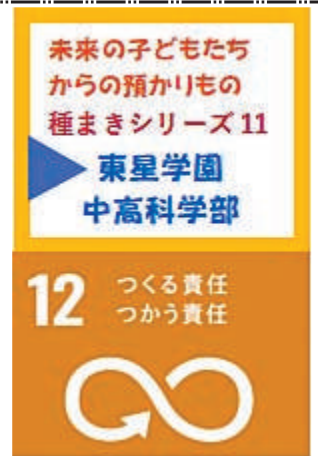
連日、体温を超える猛暑日を記録していた7月。小学生は終業式を終え、いよいよ夏休みが始まる、と笑顔で帰ってくる姿を横目に見ながら、黙々と重いパイプを運び出す。作業用に建てたタープの下で湧き出る汗を拭きながら水分補給をする。毎年この時期の風物詩、納涼祭の準備が始まると自然と「去年はこうだった」「昔はこうだった」と思い出話に花が咲く。年数の浅い職員からすれば、先輩職員とのこういう会話は学園の歴史に触れる瞬間でもある。納涼祭のシンボルの櫓は、職員と自治会の方と有志の子ども達で組み立てていく。安全のため、作業をする度に丁寧な声を掛け合い、櫓を組んでいく。

素人の組み立てなので、組んだ後も微調整に時間がかかる。ただ、今年の櫓は歪みもなくきれいな仕上がりになった。準備に集まった全員が良い表情で作業が続く。櫓が立つと、提灯の飾りつけ。一気にお祭りの雰囲気が出始める。出店や音響の準備が整いだすと、子ども達の神輿が地域を駆け巡る。「わっしょい!」と職員も子どもも熱さをかき消すように声をだす。長年見守ってくれている警察官の方の頼もしい誘導で今年も無事にお神輿が終わる。日が暮れ、掛け声とともに提灯の明かりが灯る。



遠くで鳴りだした雷にも負けないくらいの迫力の和太鼓の演奏で祭りが始まった。雷の光もちょっとした演出のように空を光らせている。かき氷にわたあめ、お好み焼きやフルーツ等様々な出店も大盛況。しかし、遠くで鳴っていたはずの雷雲は徐々に近づいてきてしまった。あっという間に土砂降り。祭りは中断を余儀なくされた。三〇分ほどして天気は回復。フィナーレは恒例の盆踊り。子どもたちも職員も地域の方も恥ずかしがる事無く櫓を囲み音に合わせて元気に踊る。アンコールでジーンギスカンのダンスをもう一度踊って今年の納涼祭も無事幕を閉じた。

(ベトレーム学園 副主任)



今回は、開催が迫ってきた東星バザールに向けて、生徒たちが計画している新しいSDGsな取り組みについてご紹介します。

身近な素材を題材に何かないか探している、紙パックリサイクルの問題と出会いました。

紙パックはご存知の通り牛乳などに利用される紙製の容器包装で、原材料としてアルミニウムが利用されているものと段ボール製のものを以外を指します。牛乳パックとしてのリサイクル活動自体は1984年に始まっており、今年で40年の節目を迎えています。紙パックのリサイクル率は2019年度で41%と、目標である50%にも届いていない状況です。学校という場においては、給食に紙パックの牛乳が出てくるので、児童にもイメージしやすく、紙パックリサイクルを促進するために啓蒙活動ができそうな取り組みを行うという事に決まりました。

牛乳パックは皮革のように使うことができないのがわかり、リサイクルとは少しづれれますが、アップサイ

クルの材料として紙パックを活用することで、紙パックそのものに意識を向けられるのではないかとということから、東星科学部紙パックレザークッズ制作が決まりました。



紙パックは良質なパルプにポリエチレンがはりつけられていて、ため耐久性が高く、牛乳パックにさわをつける

とまるで「Tyvek (米国 DuPont 社が開発した高密度スパンボンドポリエチレン繊維から作られた不織布)のような風合いになりとてもおしゃれな製品が作れそうです。

全国牛乳容器環境協議会によると10の紙パックを焼却処分せず、リサイクルするとCO2排出量が23.4g削減できるとの事なので、10の紙パック一つから一製品作るのであれば十製品で約234gのCO2排出量削減に貢献できることとなります。自分の行動が具体的にどれだけCO2排出量削減につながるかわかりやすく、指標として生徒のモチベーションにもつながりそうです。

具体的な製品に関してはまだ試行錯誤している段階ですので東星学園バザールを楽しみにしていただけだと思います。

(記・科学部顧問 中尾)

シスターレジナ 田富 フジエ



一九三三年 七月三日 生
一九六五年 七月十七日 立誓願
二〇二四年 七月十七日 修道女会



先日閉幕したパリオリンピックで、日本は海外開催地での獲得メダル数を更新し、大きな話題を呼びました。今年は特にそのメダルについて感じる事がありました。優勝して金、決勝で惜しくも敗れ銀。それらは素晴らしい結果です。けれど次の銅メダルは、途中で負けて強い挫折を味わった後、さらに勝利しないと得ることが出来ません。その状況は、私達一般人の日常にも重なる気がします。挫折を乗り越える姿に強い感銘を受けた夏でした。

(杉山 智和)

八月初めころ、近隣施設や病院でコロナ感染者が発症していると情報があり、ベタニアホームも面会制限や職員へ注意喚起してきましたが、八月後半になり、利用者の数名がコロナ陽性になり、隔離対応を行いました(食堂を隔離スペースに)、感染拡大の防止に努めました。今回は感染者数が増えることなく収束することを願いながら、少ない人数で頑張っている職員に感謝しかありません。

(中村 英男)

ベトレム学園の夏は納涼祭から始まり、各ホームの行事や招待行事、園内での水遊び等、充実したものであります。夏の締めくくりに行事である、平和と感謝のミサとお楽し

数十年前からカンカンカンと「お告げの鐘」が本部修道院の塔屋から日に3度朝夕、時を告げ、地域から苦情が来ることもなく空気のように溶け込んでいます。同時に信者やシスターを「お告げの祈り」へといたさない続けています。シスターの手で鐘を鳴らした時代から機械仕掛けに、そしてテープへと変遷。施設で働き始めたとき、職員の方が移動中の階段で鐘の音で足を止め、祈っておられる姿が、私の中でミレールの「晩鐘」と重なって焼き付いています。この夏の落雷で故障中、復活が待ち遠しい。

(Sr 中野 利恵)